

巻 頭 言

シャーギー種問題について

蔵 知 毅

岡山県にシャーギー種が導入されて満6年になる。その間に輸入されたり、増殖したりして、現在ではもう2,500頭になっている。最近東北の一部の県でシャーギー種が問題になり、ラジオや新聞や雑誌が盛んにこれを採り上げて、乳価が安いとか、能力が低いとか、仔牛の販売に困るとか云って、如何にもシャーギー種そのものの将来性がない様なことを云っているが、全く不都合なことであると思う。シャーギー種が導入されている県は全国で12カ所である。一部の県の一部の問題を採り上げて、あたかも全シャーギー種の将来性を云々することは当を得てないし、その影響を考えると問題は大きいのである。新しい品種の牛であるが故に一般から注目をされているので、少しのことも大きく採り上げられ、騒がれるのである。

乳価の点についても岡山県は県酪連で共販制度を敷いているので、他の地区よりも有利であるし、夏に乳量が増加し、冬場に減少することは、反って夏場のホルスタイン種の減量をカバーしている状況であって、むしろこの意味では大きな意義があるわけである。

能力が低いと云っても、飼養管理の技術や年令的な差もあり、一概にも云えないわけである。かつて

現地に於て購買に立会い、牛の選定に当って実際に経験をした者として考える場合、多数の低能力のものがあるとは考えられないし、飼育者を代えてみたら出だしたり、産次を重ねるに従って乳量の増加も考えられるので、研究を要する問題である。既に一部の県では互助会の制度を設け低能力牛の淘汰も行っているので、自分達の問題として、研究したい問題である。

仔牛の販売の問題については、本県では地区の拡大を図り、適地に導入を計画しているし、経営の規模の拡大も図っているわけである。山地酪農の発展の考えられる今日、山地向きのシャーギー種にも適地はあるわけであり、又希望者も多いわけである。計画的に販路を開拓して行けば、自ら解決される問題である。育成技術が悪く、発育の悪いものは何時の場合でも売れ残りは当然であって、ここにも飼育技術の問題が起るわけである。

県はこれ等の各種の問題について検討を加え、シャーギー種の発展に努力しているので関係者の御協力をお願いする次第である。